

鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター 第4回公開セミナー

鹿児島とキリスト教 第4回

薩摩国におけるキリスト教宣教の展開

基調講演 「薩摩国におけるキリスト教宣教の展開

ー島津氏とキリスト教を中心としてー」

聖トマス大学大学院教授、東京大学名誉教授

五野井 隆史

日 時:2011年3月11日(金) 14:00 ~ 16:30

於 :サンタマリア館 階段講義室

講演:【講演者の好意により、ここには論文として纏められたものを掲載します。】

はじめに

ポルトガル商船が頻繁に薩摩に来航したのは1540年代半ば以降の一時期のことであったが、1471年(文明3)足利幕府に命じられて琉球貿易に深く関わるようになった島津氏は、ポルトガル商船の来航に大きな期待を寄せると共に、1549年に中国船で来着したイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの一行に対し当初は寛容な態度を見せた。島津氏はそれ以降も琉球に貿易船を送る一方で、ポルトガル等外国商船の来航を切望し、イエズス会との関係を確保しようと努め、同会の仲介の許にマニラ貿易を志向し、遂にはドミニコ会宣教師の招致に成功しマニラ貿易に強く執着した。まずザビエルの鹿児島における事績を検討する。次いで、島津氏は対外貿易を実現し遂行するためにキリシタン宣教師とどのように関わったのか、そしてザビエル以後薩摩国内におけるキリスト教の宣教はどのように展開し推移したか、島津氏とキリスト教との関わりを貿易船招致問題に焦点をあてることを通じて見たい。

1. ザビエルの鹿児島滞在とその事績

1549年8月15日、ザビエルは中国人海賊アヴァンのジャンク船で鹿児島の祇園之州辺りに上陸し、1550年8月末まで滞在した。この間、8月初旬～下旬に平戸に赴いている。

1) 鹿児島の人々のザビエルらに対する反応

ザビエルらが好感をもって迎え入れられたことは、人殺しのアンジローがほぼ無条件のかたちで帰国を許され、インドの見聞が称讃されていることから示唆される。「私達の善良で誠実な友人であるパウロ・デ・サンタ・フェーの町で、私達は同地の武将や城主から、また同じように民衆のすべてから、たいそう親切に愛情をもって迎えら

れました。すべての人々が、ポルトガル人達の土地から来たパードレ達を見て驚嘆しています。パウロがキリスト教徒になったことを奇異に思う者は誰もおらず、むしろ彼等は彼を賞賛しています。そして、彼の親戚の者もそうでない人々もすべて、彼がインドへ赴いて誰も見たことのないものをいろいろ見聞したことを、彼と共に喜んでいます」(ザビエル、1549年11月5日付書翰、東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』訳文編之1(上)、206頁)。

2) 国主島津貴久のザビエル引見・宣教許可付与

貴久は、先ずアンジローを招いてインド、ポルトガルに関する彼の見聞について質し、ポルトガル人の習慣、およびその勢力、指揮権、またポルトガル人がインドに所有していた領地等の政治的問題など様々な事柄について質問した(同206～207頁)。ザビエルの書翰には報じられていないが、勿論、彼が伴って来たザビエルとキリスト教についても聞き質したであろう。アンジローがこの時に持参した聖母マリアの画像(聖母子像の聖画像)に対する貴久と母寛庭の対応について見る時、それは明らかになる。すなわち、「太守duque(貴久)はそれを見て驚き喜んで、私達の主であるキリストと聖母の画像の前に跪いて恭しく尊敬を払ってこれを拝み、彼と一緒にいた者一同に対して同じようにするよう命じました。そのあとで、太守の母に画像を見せますと、彼女はこれを見て驚き、たいそう喜ばれました。パウロが私達の居た鹿児島に帰って来たのち数日してから、太守の母は一人の武士を遣わしてどのようにすればその画像と同じものを制作することができるかと尋ねさせました。そして、同地には原料がないために制作を断念しました。」(同207頁)。

島津貴久は、アンジローとの対話の後、9月29日(大天使聖ミゲルの祝日)に、伊集院の城(一名一字治城)においてザビエルを引見し、鹿児島居住と宣教の許可を与えた。ザビエルによると、「彼は私達を厚く尊敬し、私達にキリスト教徒の教えが書かれている書物(聖書?)を大切にするように言い、イエズス・キリストの教えが真実でしかも立派なものであるならば、そのために悪魔を苦しめることになるだろう、と述べました。それから数日して、彼はその家臣に対して望む者はすべてキリスト教徒になれる旨の許可を与えました。」(同221頁)。

なお、貴久の母寛庭はアンジローから聖母子像を見せられた直後に、あるいは画像の制作を尋ねて武士を遣わした折りに、キリスト教の教理の概要を求め、これに対して、アンジローは数日で教理の概要を作成したことが知られる。ザビエルによると、「この婦人はキリスト教徒達が信じていることを私達が書面にして彼女に送付してくれるよう求めました。このため、パウロはこれを作成するのに数日を費やし、私達の信仰について多くの問題をその国語(日本語)で書きました。」(同207頁)。

アンジローが作成したキリスト教についての書き物が日本における最初の教理書と

いうことになる。極めて簡単な数丁からなるものであったろう。それは、おそらくザビエルの教理「二九ヶ条」を盛り込みながら、デウスと称する万物の造り主がいて世界を創造し、これには始めも終りもないこと、靈魂が存在し肉体が死んだ後にも存在すること、悪魔の天使(ルシフェル)がおり、また人祖アダムが犯した罪のこと、デウスの御子の誕生・受難・復活や最後の審判と地獄のこと、キリスト教徒が守るべき十誡のこと等が述べられていたように思われる。アンジローが数日を費やして苦心して作成したことからすれば、キリスト教に関する大凡が述べられたと見ていいのではなからうか。彼がゴアでその要点を日本語で書き留めていた「マタイ福音書」の教え、特に「山上の説教」の八つの幸せが挿入されていたと推測される(パウロのロヨラ宛1548年11月29日付、ゴア発信の書翰、同79頁)。

3) ザビエルの説教

ザビエルは鹿兒島到着から最初の書翰を発信した11月5日までの期間、日本語を殆ど話せなかったかと思われる。このため、アンジローが説教者として大きな力となっていたことは否定できない。ザビエルは長文の書翰(「大書翰」と通称)において、「パウロは多数の親戚や友人に昼夜にわたって説教をして多忙を極めていました。…当地では現在キリスト教徒になることを誰も奇異に思っていないし、彼等の大部分は読み書きができますので、すぐに祈りを覚えます。」(同208頁)と述べて、説教者としてのアンジローの役割を高く評価している。彼は一時インドに戻ってヨーロッパの同僚達に書き送った1552年1月29日付、コーチン発信の書翰においても、アンジローが数多くの説教を行なったためにおよそ100人近い者がキリスト教信者になったと報じている(訳文編一(下)、84頁)。

鹿兒島に着いたばかりのザビエルは、日本語に対しては内心忸怩たるものがあり、その心境について、「今、私達は彼等の中にあっては彫像の如き存在です。彼等は私達について多くの事柄や他のことを話題にし語っているのに、私達は言葉が理解できないために黙っています。今私達に必要なことは、言葉を習得するために子供のようになることです。」(一(上)、208頁)と述べて、言葉を自分達に与えて欲しいと神に懇願している。

そのような状況の下で、ザビエルは、ゴアからの航海中に日本語を習い覚えたイルマンのジョアン・フェルナンデスを伴って1日に2度、島津家の菩提寺福昌寺門前の石段において説教を行なった。日本語に訳されてローマ字にされた「29か条の教理」を中心にしてキリスト教について解説したものが、イルマン・フェルナンデスによって代読され、二人は乏しい日本語で質問に答えた(フロイス、日本史)2章)。ジョアン・ロドリゲスによれば、「通訳のパウロ・デ・サンタ・フェーがそれ(信仰の玄義)を聴衆に説明した」(『日本教会史』下、371頁)。

説教では、神デウスが「大日」として説かれ、教理は仏教用語を多用して説明された。十誡は仏教の五戒と共通するものが多くあり、最後の審判による天国と地獄は死後における極楽と地獄に対応するものとして受け止められたようである。大日の教えは、当初はさほど違和感をもたれることなく、天竺教・天竺宗として称されていたように思われる。しかし、十誡の解説に際して、特に一夫一婦制について言及し、また男色を非難して仏僧の悪習・倫理的罪惡を厳しく糾弾したことは、天竺から渡来した宗教に対して仏僧に警戒心を起こさせるに至ったようである。ザビエルは、俗人は坊主と呼ばれているパードレや聖職者と見なされている人々よりも罪は少なく道理に叶った生活をしているが、坊主らは自然が厭う罪惡に傾いていて、それを認めて否定することはしない。このことはすべての者に周知であるので習慣となっていて誰も奇異に思わない。私達はしばしば坊主達にこのような醜惡な罪を犯さないように言いました。彼等は私達が言ったことを冗談と思って、このことをあざ笑い、そのような醜い罪を非難されるのを聞いても少しも恥辱とは思っていません。こうした坊主達は武士の子弟である多数の子供をその僧院にかかえていて、彼等に読み書きを教えています。そしてこの者達と一緒に邪惡なこと(男色)を行なっています。この罪惡は習慣となっていますので、すべての者は惡と思っていますが、それには驚きはしません」(1(上)、190頁)と指摘する。なお[]の箇所はEvora版では省略。

4) 福昌寺住職(15代)忍室Ningitとの対話・仏僧を高く評価

ザビエルは忍室との出会いによって仏僧の学識の深さと説教の巧みさをも実感した。彼は所謂、1549年11月5日付の「大書翰」において、仏僧の男色について述べ、博識な仏僧ほど大きな誤謬と邪惡をもっていると指摘したのちに、忍室と対話したことを報じている。すなわち「最も学識のある者数人とししばしば話しましたが、特に、この地方のすべての者がその学問と生活態度と高位にあること、また80歳という高齢のために深く尊敬している一人の人物と話しました。かれはニンジツと称し、日本の言葉では「真実の心」を意味し、彼は彼等の間では司教のごとき存在であり、その名が相応しいものであれば祝福された者となります。」(同192頁)。

ザビエルは8月15日の来着以来11月5日までに、幾度か忍室に会い、言葉の不自由さにも関わらずキリスト教の核心について説明を繰り返したようである。禅宗が否定する靈魂不滅の問題が特に対話の中で取り上げられたかの印象である。ザビエルは「私達の靈魂が不滅であるか、靈魂が肉体と共に死ぬものであるかについて、彼は決めかねて疑念を抱いていることが分かりました。彼は私に、ある時には然りと言い、また別の時には否、と言いましたが、他の学者達はこのようなことを私は懸念しています。」(同上)と述べる。ザビエルが話題とした靈魂不滅の問題に戸惑いながらも柔軟に対応した忍室について、「私の親しい友人となり、それは驚くべきことです。」と親

近感を抱いていたザビエルが、その後も翌1550年8月末に鹿児島を退去するまでのほぼ1年間に忍室との交流を続けていたと思われることは、フロイスが「日本史」で述べているように、1562年1月に同地を訪れたイルマンのルイス・デ・アルメイダが忍室の弟子である仏僧達から厚遇されたこと(フロイス、「日本史」33章)から推測される。

ザビエルが滞在2ヶ月余という短期間に仏教と仏僧についてどれほどの知見を得ていたかは明確でないが、忍室やその弟子達の言動を通じて、特に仏僧に対する認識を深めていたことは彼が仏僧に高い評価を与えていることから、ある程度は推測される。―「日本人の多くは坊主であり、これらの者はすべての人々にその罪業が周知であるにもかかわらず、彼等が居住している土地では非常に敬われているということです。彼等が甚だ評価を受けている理由は、彼等が厳しい節制を行なっているためである、と私には思われます。…またいくつかの物語、あるいはさらにははっきり言えば彼等が信じている事柄についての寓話を上手に話すことができるために、こうしたことが理由となって人々は彼等に大きな尊敬をはらっているように、私には思われます。」(同212～213頁)。

5) 仏僧のインド派遣構想と日本宣教への布石

11月5日付の書翰5通を託送したアヴァン(彼は11月5日以前に鹿児島で死没)のジャンク船が鹿児島を出港した時期ははっきりしないが、11月中には出帆したように思われる。同船には二人の仏僧を含む日本人4人が乗船した。―「大書翰」によると、「今年二人の坊主がインドへ赴きます。彼等は坂東と都の大学におりました。また彼等と一緒に、多くの日本人が私達の教へのことを学ぶために行きます。」(同220～221頁)。またゴアのサン・パウロ学院長アントニオ・ゴメスに宛てた書翰でも「そちらに二人の日本人坊主が行きます。彼等は都と坂東の大学におりました。あなたは細やかな愛情を示して彼等をもてなして下さい。日本人達はそれを望んでいるからです。」(同239頁)と同内容のことを報じている。

ザビエルは短い鹿児島滞在中に坂東の足利学校や畿内の主要な寺院、特に五山について、そこで修行を積んだ仏僧から直接知る機会を得たばかりでなく、彼等二人にインド渡航を決断させるのに成功した。ザビエルは多数の日本人がインドに行くものと期待していたが、実際に渡航した者は4人に過ぎなかった。彼が1552年4月8日付のゴア発信の書翰で、日本人の海外渡航に関して「日本の名誉ある人びとは自分の国から[外へ]出ることを決して喜びません。」(1(下)、162頁)と述べているのは、日本人のインド渡航が彼の期待通りに行かなかったことによるのであろう。マラッカ在留のフランシスコ・ペレス神父の1550年11月24日の書翰によると、死没したアヴァンのジャンク船(ペレスはナビオ船と表記)は同年4月2日にマラッカに到着し、4人の日本人(薩摩の人びとであろう)はマラッカの人びとから大歓迎された。彼等は方々で

もてなしを受け、キリスト教教理までも教え込まれて、到着して1ヶ月後のキリスト昇天の祝日(5月15日)に洗礼を授かった。彼等のうち3人は11月24日以前に帰国し、ただ一人の者がマラッカに残っていた(同258頁)。仏僧二人も洗礼を受けたが、彼等が帰国者3人の中に含まれていたのか、あるいはその一人が残留してインド渡航の志を抱き続けていたのかは判然としない。彼のその後の消息について書かれたものはないようである。

ザビエルは仏僧達がゴアに赴き、アンジローのように、聖パウロ学院で学ぶことを期待していたようである。さらに日本の大学と称していた足利学校で学んだ彼等が聖パウロ学院で仏法について講じること、またキリスト教と仏法との対話が実現することを望んでいたように思われる。彼は、日本における宗教事情、特に大学に相当すると考えていた足利学校や主要な大寺院の学問所の詳細についてパリ大学を始めとしたヨーロッパのキリスト教の主要大学に送る意向をすでに鹿児島において表明していたし(1(上)、219頁)、またパリ大学等で無為に過ごしている神学者や哲学者の来日を願望していたから、鹿児島の仏僧がゴアで仏法について語り、ヨーロッパの学者達の日本渡航の呼び水になればと秘するところがあったのかもしれない。日本人仏僧のゴア渡航はヨーロッパにおける最高の学者達を日本に招くための布石として計画されたのであろう。

従って、ザビエルは先ずインドのイエズス会における最高の人材を日本に呼び、京都および足利学校に派遣して宗教論争にあたらせようと考えたようである。ザビエルが当時インドのイエズス会において最も学殖が深いと評価していたガスパール・バルゼオ神父(オランダ出身、ルーバン大学で修士号を習得、1548年インドにわたりホルムズで活動、1552年インド準管区長)に日本渡航を命じたのは1549年11月5日付の書翰においてであった(同225頁)。彼の随伴者としてバルタザール・ガーゴ(1552年来日)と修道士ドミンゴス・カルヴァリヨが指名された。

6) 教理書印刷の意向

ザビエルが早い時期に日本語の教理書の印刷を考えていたことは鹿児島発信の書翰から知られる。すなわち「この冬、私達は日本語で信仰箇条 os artigos da fé についての説明書を作成し、これを少し多く印刷することに従事するものと思われます。それは、重立った人々はすべて読み書きができますので、私達の聖なる信仰が理解されるためであり、また私達は各地へ赴くことができませんので、多くの地方へ信仰が弘布されるためです。私達の愛すべき兄弟であるパウロ(アンジロー)は、靈魂の救済のために必要なすべてのことを彼の言葉に忠実に翻訳するでしょう。」(同221頁)。ザビエルが鹿児島において1549年末にも教理書の木版印刷を考えていたことは確かなことである。それは、おそらく薩摩国内において刷られていた木版の書物を実際に見て印

刷を考えるようになったのであろう。

薩摩における印刷は、文明13年(1481)に島津氏重臣伊地知重貞が、島津忠昌に招かれて朱子学を講じていた桂庵玄樹と共に朱子新註の『大学章句』(文明版大学)を印刷したことが始まりとされる。同年『聚分韻略』が和泉荘で開板され、延徳4年(1492)には『大学章句』の再刻本が出ていたし(『国史大辞典』6、400頁)、畿内の主要寺院では開板が早くよりなされていたから、かなりの木版の印刷本が薩摩国内にも流布していたと見ていいであろう。それらがザビエルの目に留まったとしても決して不思議はない。

教理の翻訳が順調に進んだこと、その内容がどのようなものであったか、そしてこれに対する鹿児島の人びとの反応等については、ザビエルが1552年1月29日付の書翰に詳述している。「私達は、パウロの町に滞在していた年には、キリスト教徒達に教理を教え、言葉を習い、神Deusの教えに関する多くの事柄を日本語に翻訳することに専念しました。すなわち、世界の創造に関して甚だ簡略に彼等がどうしても知っていなければならない事柄を説明しています。それは、彼等がまったく認識していない万物の創造主が一人存在するというようなことであって、他の必要なことと共に、キリストの託身に至るまで、キリストの生涯を述べて昇天に至るまでのすべての玄義に言及し、また[最後の]審判の日の説明をしています。私達は大変に苦勞してこの書物(教理書と思われる)を日本語に翻訳して、それを私達の文字(ローマ字)」で書きました。従って、私達はキリスト教徒になろうとする人々にこれを読み聞かせていますが、それは、彼等が救われるためには神とイエズス・キリストを礼拝しなければならないというようなことを理解できるようになるためです。キリスト教徒もキリスト教徒でない者も、その教えが真実であると思われたために、これらの事柄を聴聞したいそう喜びました。従って、もしも彼等がキリスト教徒になるのをやめるとすれば、それは、土地の領主に対する怖れのためであって、彼等が神の教えが真実であり、彼等の教えが偽りであることを認識していないからではありません。」(1(下) 85～86頁)。

7) ザビエルと市来

ザビエルは異なることに、自らの書翰には市来の宣教についてまったく言及しなかった。1562年になされたアルメイダの訪問によって、市来のキリシタン教界の存在が確認され、最初期のキリシタンの共同体のありようが知られるに至った。ジョアン・ロドリゲスによると、ザビエルは1550年平戸に赴く途中で市来城に寄り、鹿児島を退去した8月末再度平戸に向かう際に12日間同地に滞在した(『日本教会史』下、400頁)。

8) ザビエルが鹿児島で得た知見・感触

ザビエルは日本人の改宗に強い可能性を感取した。日本人が各人の意志に基づき独

自の宗派に帰依する自由を有していたことについて、カトリック教以外は異端であるとした世界に育ったザビエルには、それは驚きであり、そして、キリスト教宣教の可能性を強く感じたことであった。彼は、1552年1月29日付の書翰の冒頭で鹿児島到着について述べたあとで、日本の宗教全般について言及して、次のように報じている。「各々異なった教義を持つ九つの宗派があります。男も女も、各人が自分の意志に従って望むところの教義を選びます。そして、誰に対してもある宗派から他の宗派に改宗するように強要することはしません。このため、夫がある宗派に属し、妻が他の宗派に、そして子供達は別の宗派に属している家があります。このようなことは、彼等の間では何も不可思議なことではありません。なぜなら、各人が自分の意志に基づいて[宗派を]選択しているからです。彼等の間には争いがあり、ある宗派が他の宗派よりも優れていると考えるために論争が生じます。そしてこのことに関してしばしば戦争が起きます。」(1 (下)、80頁)。

また、領民の信仰が領主によって保証されること、宣教活動には領主の保護が不可欠であることを強く認識したことである。1550年6,7月頃にポルトガル船が平戸に入港したことがザビエルに伝えられて彼が平戸に赴いたことを契機に、国主貴久はポルトガル船の薩摩寄港が実現しなかったことに不満を抱き、仏教勢力と仏僧達のキリスト教に対する反発・反対を重視して領民のキリスト教への改宗を禁止した。ザビエルは「1年が過ぎて、土地の領主が神の教えが広まっていくのを喜んでいないことが分かったため」鹿児島を退去したと述べると共に、その理由ともなった仏僧によるザビエルら追放の動きについても詳述している。「坊主達は、多くの土地を所有している大守である同地の領主に対して、もしも彼が家臣達に神の教えに帰依することを許すならば、領地は失われ、彼等の寺院は破壊され、人々から崇敬されなくなるだろう、と言いました。なぜなら、神の教え *ley de Deus* は彼等の教えとは反対であり、神の教えに帰依する人々は、彼等の教えを始めた聖者達(宗祖)に対して当初抱いていた信心を失ってしまうからである、と言います。坊主達は、その地の大守が死罪をもって何者もキリスト教徒にならないよう命じるようにさせました。このようにして、大守は神の教えに誰も帰依しないよう命じました。」(同85～86頁)。

2. アルメイダの宣教と島津貴久のインド宛書翰

1) 市来のキリシタン教界 アルメイダ自身のイエズス会会員宛1562年10月25日付、日本(横瀬浦)発信書翰によって薩摩への旅行とその宣教の概要が知られ、特に日本における最初期のキリシタン共同体である市来のキリシタン教界Christandadeの様相が初めて紹介された。

1561年、ポルトガル商船2隻が薩摩国阿久根と坊津(一説には京泊)に入港し、同年11月 坊津<トマリtomari>停泊中の船長マノエル・デ・メンドーサらが告解の秘跡に与るため豊後府内にトルレス神父を訪問し、船長は島津氏から署名入りの白紙を委託されていた。翌12月、トルレスはアルメイダを薩摩に派遣した。アルメイダは日本人イルマンとメンドーサ及びポルトガル人3名と共に府内を出発した。その経路は、1日路の朽網に1泊、陸路3日路ののち港町(高瀬?)に到着後、海路八代(?)から阿久根に到着した。同地には船長アフォンソ・ヴァスの船が停泊、しかし、船長ヴァスはアルメイダに会って数日後(1562年初め)に不慮の死を遂げた。次いで同港から海路13レグアのある港に3時間余で到着し、翌日、アルメイダは2レグアの所に位置するある城(市来<鶴丸城>)へ赴いた。それは1562年1月初旬であった。

市来城訪問の目的は、すなわち「その城へ行ったのは、バードレ・メストレ・フランシスコがキリスト教徒にした領主の妻や息子たちを訪問するためであった。」同地には、ザビエル授洗したキリシタン約15名からなる信仰共同体が1550年以来存続し、領主新納康久の妻と老臣ミゲル veador da casa (城の管理人、家令、執事、家老)が指導していた。キリシタンたちは、ザビエルのこと、豊後、都、その他の地方のキリシタン教会のことなどについてアルメイダに質したが、彼等が抱いていたと思われる疑念、すなわち、ザビエルが説いた「大日」がデウスと同一であるか否かの質問に対して、アルメイダはこれをきっぱり否定してデウスの教えであることを明言したであろう。これによって、市来ではキリスト教を天竺宗あるいは天竺教と称することはそれ以降なくなったように思われる。

この小さな信仰共同体の精神的拠り所となったのが、ザビエルが残した自筆の祈祷と連祷の書物であり、苦行用の鞭ジシビリナであったが、これらが健康維持のために機能し、また病気の際にはお守り(護符)や呪物としての効用を発揮してきたことが指摘されている。ミゲルが、ザビエルから生まれて来る子供に洗礼を授けることを委ねられて実際に洗礼を授け、また彼が教理を説いていたために、歳をとっていた者達はすでに祈りを知っていたこと、また鞭打ちの業も定期的に週の一日、キリシタン全員が集まって各自3回していたことなどが明らかにされた。ロドリゲスは『日本教会史』で、教理が「毎日曜日と祝日」に説かれていたという。ミゲルの共同体における役割は、1579年に来日した巡察師ヴァリニャーノが設けた“看坊”の仕事そのものであった。彼等が唱えていた祈りとは、ザビエルが編集した「二十九ヶ条の教理」にある三つの祈り、“主の祈り”“天使祝詞(めでたしマリヤ)”“使徒信教(クレド)”であったであろう。

アルメイダは携行した聖母の画像(聖母子像?)を俄作りの祭壇に飾って、9名に洗礼を授けてから鹿児島に出発し、同地に4か月滞在した後、第2回目の市来訪問を行ない10日間滞留した。この間、毎日ドチリナ[・キリシタンの説明]と説教を2度行なっ

ている。聴聞者の一人が聴いたことを一冊の書物(カキモノ)にまとめたため、アルメイダは豊後その他の地方のキリシタンに示すためその1書を持って行くことを決断した。そして、その者にキリスト教の玄義に関する一つの書を謄写させている。これは日本語で、美しい文字で書かれた55葉からなる書物であった。アルメイダは彼に日曜日毎に同書をキリシタンたちのために読む役目を与え、17歳になる城主の長男にも同様の役目を与えている。

アルメイダの滞在中に、キリシタンたちは城中に「たいへん敬虔で立派に整えられた家casa」を設け、これを教会とし、ここに「訪問の聖母マリア」の画像を掲げた(Cartas do Japao.I.Evorã, f.107.)。キリシタンの数は、ザビエル以来の約15名に加えて、およそ70名が新たに改宗したというから、すでに85名以上からなる信仰共同体に成長していたことになる。アルメイダは、その様相を見て「この城は修道者たちreligiososのカーザ(家)である」と形容している。

2)鹿児島滞在中の宣教 アルメイダは1562年1月に鹿児島に入った。彼は同地の初期のキリシタンの数について、「ザビエルはトルレスやフェルナンデスと当地で一冬を過ごし、約70名のキリスト教徒を作った」と報じているが、それ以来12年を経て彼が再訪した時点でどれほどのキリシタンが残っていたのかは見通すことはできなかったようである。

アルメイダはポルトガル人達(メンドーサら)と共に国主島津貴久を訪れてトルレスの書翰を呈し、彼の面前で教理について説教している。彼が豊後から持参した書翰は、トルレスから貴久宛のもの1通と、貴久が送った署名入りの白紙にトルレスが代筆したインド宛の2通の計3通である。その数日後に、彼は貴久のインド宛書翰を持ってメンドーサの船が停泊する泊(坊津)に向け出発し、途路、国王の祖父 Avo (正しくは父忠良と思われる。隠居地は加世田、彼はこの時69歳。)を訪問したのち、3日目に坊津に着き、15日間当地に滞在して船員の治療等に当たった。船にはポルトガル商人が高値で買い取った多数の日本人女性が乗せられていた。彼がトルレスによって派遣された理由の一つが、女性達が専用の船室に置かれ二人の男が彼女達の世話に当ることを守らせることにあった、という。

鹿児島に戻ったアルメイダは当地に4か月間滞在した。この間、「当市に住む若干のキリスト教徒の訪問を受けたが、聴聞に来る異教徒は彼等が坊主達や彼等の偶像の教えに熱心に従っているために極めて少数であった」という。また彼は主要な坊主達の一人で「非常に大きな三つの僧院の上長」の仏僧(50歳ほど)と親しくなったことを報じている。この仏僧はザビエルと親しく交わり、ザビエルがかつて説いた事を知りたいと望んだが、彼に説明する通訳がいなかったために全く理解できなかったと言って、知りたいと望んでいた事柄について、すなわち、創造主はいるか、何故天気は変化する

るのか、なぜ大地は揺れ雨が降るのか、その他日本人が常に質問する事柄についてアルメイダに尋ねている。フロイスが『日本史』において、福昌寺の末寺南林寺の住職で東堂の位置を占め忍室の弟子であったとする者が、これに該当する(1部33章)。彼はその後友人の仏僧二人を伴ってアルメイダを訪ねて説教を聴聞しキリスト教への改宗の意向を示して親しく交わったが、それ以上の決断はなかった。鹿児島での改宗者は、身分の非常に高く国主に近侍する者2名が妻やその家臣36名と共に受洗した。アルメイダが1561年12月から6月頃までの薩摩旅行で改宗させた者は200名余であった。

3) 島津貴久のインド宛書翰 すでに言及したが、貴久は白地に署名のある二葉の紙をトルレス神父に送った。アルメイダが記すところによると、「それは、彼の意向を一通は[インド]副王へ、他の一通は[イエズス会インド]管区長へ書いてもらうためであった。」貴久はトルレスに代筆を依頼し、署名入りの白紙2葉をメンドーサに託して豊後在留のトルレスに送った。

①イエズス会インド管区長宛[永禄]4年9月28日(1561.11.5)付 トルレス派遣の修道士2名が鹿児島を訪問し、その言葉と教理に驚嘆のこと、またポルトガル人の来着来航を高く評価すること、南蛮人の宣教師とポルトガル船を歓迎する旨。

②インド副王宛[永禄]4年、薩摩発信 〈永禄4年は、1561年1月16日から1562年2月3日迄〉 修道士2名が鹿児島を来訪し宣教のため巡歴のこと、戦時中のため援軍準備に追われて栄誉を与えざること、山川lomango 来着のポルトガル船にも十分に対応できず他国から侵入の盗賊によりアフォンソ・ヴァスと称する者が殺害されたことを遺憾とすること、当地に来るポルトガル人とパードレが閣下の書翰ないし伝言を持参する時にはそれに相応しい待遇と名誉を与える旨が、簡潔に述べられている。

アルメイダの鹿児島着後に、ヴァス急死の事態になり、トルレスが代筆したと思われる貴久のインド副王宛書翰は変更を余儀なくされ、その扱いについてアルメイダは貴久と協議した。彼は「国王と別れ、彼からインドへ送られるはずの書翰について協議してから、私たちは船の停泊地に向けて出発した。」(岸野 久『ザビエルと日本』(吉川弘文館、1998年、267頁)。

島津貴久の上記書翰2通は、10数年振りに薩摩国内に来着したポルトガル商船が引き続き来航することを強く要望し、同時にパードレの派遣をも乞うたものである。

3. 1571年代以降の島津氏とイエズス会

島津貴久が死没したのは1571年のことである。島津領内には1561年以降ポルトガル商船の来着はなく、イエズス会宣教師の来訪もなく、薩摩国内のキリシタン達に関する消息が伝えられることはなかった。

1) 島津義久の宣教師派遣要請 1577年、島津氏がイエズス会の上長フランシスコ・カブラルに書翰を送って宣教師派遣を要請したのに応じて、カブラルはイルマン・ミゲル・ヴァスを鹿児島に派遣した。その時期は復活祭(4月7日)後であり、ヴァスは、大村から鹿児島に至ったようである。彼の1577年10月20日付、大村発信書翰によると、国主義久が鹿児島に不在のためヴァスは彼の居場所に赴いた。義久は領内にキリシタンが居住すること、彼の住む市(鹿児島)に教会を建設するための地所を与え、望む者がキリシタンとなることなどを許可し、一方で山川の町の住民から先ず宣教を開始することを要望した。またヴァスが上長カブラルに報告のため鹿児島を辞去するに際し、国主は、馬2匹と有馬領の口之津までの船を提供した。

ヴァスはまた「司教のような権威を有する一人の老僧に会った。」老僧はザビエル師の親友であったと言って、彼を厚遇した。彼(老僧)が改宗の意向を示したので当面は彼に十字架と祈祷を覚えるためこれを書面にして与え、次の機会にその望みが果たされるとの期待を抱かせて別れた、と伝える。この老僧は、1562年にアルメイダを厚遇した南林寺の住職であったように思われる。

また、市来城の守将で16年前にアルメイダから受洗した者が夜間にヴァスを訪れ、キリシタンであることを名乗れる時が来たことを喜んでいること、聖母マリアの画像があり、その前で祈っていることをも述べた、とも言う。すなわち、「私はそこで栄光のうちにあるパードレ・メストレ・フランシスコの[時代の]キリスト教徒数名に会った。その者たちは苦行用鞭 *disciplinas* や彼(ザビエル)の手紙をたいへん敬って持っており、それらをさまざまな病気の際に用い、聖なるものであると言っていた。彼らのうちの一人はある城の主(城主) *senhor de huma fortaleza* であり、彼は16年前にイルマン・ルイス・ダルメイダが洗礼を受けた者であった。彼は夜間に私に会いに来て、キリスト教徒として表明できる時がきたことを喜んでいると言った。」ある城の主とは市来城主を指している。アルメイダの1562年10月25日付の書翰では、市来のキリシタンたちが「城主(新納康久)の二人の子を含む子供数名をキリスト教徒にするよう乞うた」とあり、またザビエルから洗礼を授かった17歳の「城主嫡男」のことはすでに言及した。

注目すべきことは、島津領内において何時の頃からかキリスト教が禁止されていたことがイルマン・ヴァスの薩摩行きによって確認されることである。そして、国主義久が領民や家臣団のキリスト教信仰を容認するような姿勢に転じたかの状況にあったことである。義久が上長カブラルに書翰を送ってわざわざ宣教師を招聘した意図は、ポルトガル船の寄港を期待してのことであったように思われる。1562年以降、ポルトガル商船の入港地は平戸から大村純忠の領内に移って、横瀬浦、福田を転々とし、1571年になって漸く長崎に定着したが、長崎は度々佐賀の龍造寺氏の配下にあった

深堀氏の襲撃を受けていまだ不安定であり、ポルトガル船は有馬氏の良港口之津に何度か入港していた。島津氏はこうした状況を把握した上で、ポルトガル商船の山川寄港を実現させようと目論んだようである。

イルマン・ヴァスが鹿児島から口之津に戻って間もなく、カブラルはドミンゴ・モンテイロのポルトガル船が長崎に到着した後に、バルタサル・ロペス神父とアルメイダの二人を薩摩に派遣した。彼等は1年近く山川に留まった。アルメイダのカブラル宛1578年、薩摩国発信の書翰は、彼が鹿児島に滞在し、当地では仏僧らが栄え、自分たちに強い敵意を抱いていること、当地の住民は裕福で自分たちの滞在を、デウスの教えが彼等の教えと相反しているために快く思っていないこと、またデウスの神が悪魔付きの聾啞者から悪魔を除いたことが評判となり、その父と家族全員がキリシタンになることを望み教理を学んでいることを簡単に報じている。フロイスは、島津義久の山川開港の意図を推測して「この港は彼等(島津)がそこをことごとくキリスト教徒にし、その地をイエズス会に与えようとして始めたものである。それは毎年シナの船がそこに来るようにするためであった。」(『日本史』)。しかし、島津氏と大友氏との抗争が激化し、しかも1578年10月(天正6年11月)に日向耳川の戦いで、島津氏が大友氏を破ったことにより、島津氏とイエズス会との関係は冷却した。ロペス神父とイルマン・アルメイダの二人はおそらく両氏の戦闘の始まる前に山川を退去したと推測される。

2) ヴァリニャーノの薩摩逗留 ヴァリニャーノが上洛を終え、豊後から長崎に帰還する途次薩摩の某港に到着したのは、1581年10月であった。彼は、白杵→細島(日向)→薩摩の某港(山川?)に着いたが、同地には4年前に平戸で受洗した一キリシタンのジアンなる者がおり、彼の母と妻ら16,7人がヴァリニャーノから洗礼を授かった。別の港(坊津)には、シナ(マカオ)で受洗のゴンサロ・ヴァスがあり、妻子ら13,4人が改宗している。ヴァリニャーノは同地から2日路の所にいた国主義久に表敬のため贈物を携えたイルマンを遣わした。島津氏との関係修復を念頭においていたのであろう。この時には、キリシタンのゴンサロ・ヴァスがイルマンに同道した。さらに前進して他の港(京泊?)に着いたが、同地では、長崎に旅行して不在であったロウレンソの妻が来訪し家族等への授洗を求めたことが、フロイスの『日本史』(第2部34章)によって知られる。

3) 準管区長ガスパール・コエリヨの計画と挫折 コエリヨが島津家主要家臣(家老伊集院忠棟)を通じて鹿児島における宣教授助・教会用地入手の可能性について打診したのは1582年であり(1582年度日本年報)、国主義久の内諾を得た上で、天草在留のアルメイダ神父が三たび派遣されたのは同年10月頃のことであった(Schütte, Introductio, p.460)。アルメイダは義久に謁見して鹿児島市内に地所を与え

られて住院 casa を造築したが、数ヶ月後に退去を余儀なくされた(1583年度日本年報)。これに対応する島津家史料は以下のとおりである。

「天正11年(1583)3月5日、...御指出無之候、白浜次郎左衛門殿を以被仰候、当所へ南蛮僧仮屋を被遣候て召置候、伯固様(貴久)已来彼宗御いましめ之儀候間、談合を以、当所へ被召置候はぬ様にとの上意也、各尤之由也」(『鹿兒島県史料 旧記雜録後編』1、1367号、782頁)

「(同年)3月8日、...此日南蛮僧当所仮屋役所に而居候、世間之物沙汰悪候、殊更今度就御虫気、ケ様之宗之者、当所へ罷居候而、諸神御内証に不合由告など候とて、先々有馬などのことく罷立候へと、一兩日懸曳共被成、被立候也」(「上井覚兼日記」)

なお、アルメイダはこの訪問時に、ザビエルが洗礼を授け、またその宿主であった老女マリアに会った。彼女について知った準管区長コエリヨは、1584年9月古参の日本人イルマン・ダミアンを鹿兒島に遣わしてマリアを長崎に招いて世話をした(1584年11月29日付、加津佐発信、「1584年度年報」)。ロドリゲスは『日本教会史』(3巻13章)において、彼女が1583年9月に死去したとし、コエリヨの配慮で荘厳な葬儀が長崎のミゼリコルディアによって営まれたと伝える。「1583年」は1584年の誤りであろう。

4) 島津氏の反キリシタン姿勢 島津氏は領内においてほぼ一貫して反キリシタンの姿勢を貫いていたが、同氏が従属させていた周辺のキリシタン領主達に対しても棄教を要求した。天草五人衆は1587年まで島津氏に服属したが、その一人、河内浦の城主天草尚種(ドン・ミゲル、1571年受洗)の嫡子久種(ドン・ジョアン、1576年受洗)は人質として1584年半ば頃より薩摩にあり、島津氏より棄教を迫られた。「彼(久種)が薩摩国主の軍勢とともに戦場にいた時のこと、国主の家臣で国家老の一人は、仏及びその宗教の大の信者であった。この人はドン・ジョアンに[キリスト教の]信仰を棄てるように幾度も勧告したが、彼は「戦で御奉仕することではただちに従うよう備えています、信仰を棄てることについては全能のデウス様に対してそのような罪を犯すよりは死を選ぶ覚悟であります。」と答えた。そのあまりにも毅然とした態度に吞まれ相手はそれ以上説得することを思い留まった。」(フロイス『日本史』2部37章)

肥前の有馬鎮純(晴信)にも棄教を要求し、キリシタンによって破壊された島原雲仙の満明寺等の再建の意向を示した。天正12年(1584)3月、有馬氏を救援して龍造寺隆信軍を壊滅させた当時の島津軍の部将上井覚兼の日記には、「(4月8日条)当郡中南蛮宗にて、温泉山坊中無惨破壊候、然者御再興之御立願被成候」、「(5月1日条)[満明寺]悉荒廢之跡無是非候」とある。

4. 島津氏のマニラ貿易への布石

1589年秋、メキシコ渡航のスペイン船が薩摩に寄港した。スペイン人パードレのヒル・デ・ラ・マタは1590年7月25日付でカツラCatura（片浦）からローマのイエズス会総会長に書き送った書翰において、彼が薩摩に赴いた経緯を次のように報告している。「私は、薩摩の王（島津義久）の求めでアマンガケAmanguche（山川）の港に準管区長から派遣されました。彼は今までは日本における私たち（イエズス会）の最大の敵の一人であるにもかかわらず、ヌエバ・エスパーニャに渡航するためフィリッピンからその港に来了エスパーニャ人達に説教をし、彼等の告解を聴くために、そしてまた彼の二カ国の主要な港である同港の人びとの改宗に私たちが当たれるように私たちの一人を準管区長に求めました。私は、この問題および他のいくつかの特別な問題について、このことから得られる喜びのために猥下に報告申し上げるべきと思いました。準管区長のパードレ・ガスパール・コエリョが亡くなったのは2ヶ月前でした。…パードレ・ペロ・ゴメスが彼のあとを継ぎました。」（マドリード歴史学士院図書館文書、9-2663、f. 487）。

準管区長コエリョが1590年5月7日に死去したため、新任の準管区長ペドロ・ゴメスは島津氏との関係修復を顧慮し、スペイン人のために同国人のマタ神父を薩摩に派遣したようである。彼は6月下旬に派遣されたが、インド副王使節の名目で再来日したヴァリニャーノが長崎に来着したのは7月21日であった。マタは上記書翰において「巡察師が4日前に長崎の港に到着した」と伝える。豊臣秀吉が1587年に伴天連追放令を発令してから3年が経過していたとはいえ、秀吉に服属を強いられた島津氏が敢えてイエズス会に海港山川での宣教活動を許容したのは、スペイン船の寄港問題を契機にしてマニラ船の誘致・マニラ貿易を視野に入れ、敢えてその布石を打とうとしたからであろう。しかし、イエズス会は慎重に対応して島津義久の要請を受けなかった。インド副王使節として上洛を控えて待機していた巡察師ヴァリニャーノは準管区長ゴメスと協議して、秀吉の意向に反することはできないと判断したのであろう。

日本とマニラの関係は、秀吉が1591年11月1日（天正19年9月15日）付の書状をもってフィリッピン総督に入貢を要求したことを機に、総督使節コーボ神父（ドミニコ会士）が薩摩の久志を経由して名護屋城に至り、さらに第2次使節フランシスコ会のペドロ・バプティスタ神父が来日して、秀吉との間にマニラ渡航について取り決め、渡航船を年間4隻とした。島津氏はこの貿易にまったく関与することができなかった。秀吉が1598年9月18日、慶長3年8月18日に死没すると、多くのキリシタン大名はイエズス会との関係を回復し、イエズス会も宣教体制の立て直しに着手し始めた。ヴァリニャーノの1599年2月20日付の書翰によれば、イエズス会は島津氏との関係維持に努めたようである。「私たちはまた薩摩の王を訪問させました。その者はその訪問に

よってたいへん喜びを示し、今後再び頻繁に書を交わし、かつて有していた友誼と交流を続けるつもりであると言いました。彼はアゴスティニョ津守殿(小西行長)とは非常に強固な友誼を結んでいました。」(ローマイエズ会文書館、Jap. Sin. 13I, ff. 258-v.)。

徳川家康がマニラとの貿易関係樹立を意図して、フランシスコ会のヘロニモ・デ・ヘスース神父を引見し、彼をマニラ総督への斡旋者としたことから、マニラ総督が要求した“八幡船”取締を条件に、秀吉による従来の日本・マニラ間貿易体制が再開され、年間4隻の渡航船が許可された。慶長4年(1599)4月朔日付の「ばはん船渡航禁止令」が家康ら五大老によって「島津宰相(義弘)・少将(忠恒のち家久)」に出された(『旧記雑録後編』3, 713号)。さらに長崎奉行寺沢志摩守正成は同年7月9日付の書状をもって薩摩少将(忠恒)に「ルソンばはん御法度」を伝え、薩摩領内到着の唐舟改めを堅く仰せ付けた(795号)。さらに義久の忠恒宛同年7月21日付の書状によれば、秀吉が禁止した真壺(ルソン壺)の商売船を家康も一段と禁止し、長崎奉行寺沢が甌島着岸の唐船の真壺について改めるため用人を遣わす旨を伝えて注意を促している(同808号)。同書状では、ばはん船のことについても言及しているが、島津氏には「ばはん船」のことは「国習之儀」として容認の姿勢であった(同811号)。

マニラ渡航船に関して、ヴァリニャーノはマニラの学院長フアン・デ・リベラ宛1599年10月22日付、志岐発信の書翰で、寺沢殿の書状(複数)が長崎に到着し、その中で「内府様の命令によって本年は3隻以上の船naviosは渡航しないように、また今後は長崎以外の地から、そして彼の允許状 licencia と内府様の指図によってコンパニャ (イエズス会)の同意書 carta de aprobacion を持参することなく何者も渡航しないように命じていました。」と報じている(Jap. Sin. 13II. f. 351v.)。ヴァリニャーノは1ヶ月後の11月20日付の追伸(24日付)でリベラに対し、イエズス会が同意書を書き与える意味を次のように述べている。

「私は総督閣下が少数の船以外には[マニラに]来航しないようにとした指図が適切であると思ったことを書くのを忘れていました。そして志摩守(寺沢)もまたその指図に応じ、内府様は允許状と印書をもった四隻以上の船が毎年そちらに行かないよう決定しました。また彼が允許状を持参していく者達が安心できる平和的な人物であることを疑わないために、彼等はまた各船のために長崎の[イエズス会の]上長がその者達がそのような人物であると言って、また四隻の船が安全に長崎のこの港を出発できるように書いてくれるように依頼しました。」(同 f. 357)。島津氏はそれでも、マニラ派船にこだわった。同年11月、長崎奉行寺沢氏にマニラ派船について伺いを立てたが、「御法度」として、ルソンへの渡航は謝絶された(『旧記雑録後編』3, 443頁)。

上記のヴァリニャーノの書翰からすると、イエズス会が家康から期待されたことは、

フランシスコ会のバプティスタ神父がマニラ渡航船に与えていた信任状を肩代わりすることであったようである。それは、二十六殉教事件によってフランシスコ会宣教師が不在となったためであろう。

島津氏はマニラ貿易の道を閉ざされ(一義久の忠恒宛[慶長4年カ]9月28日付書状は寺沢にマニラ派船を打診して謝絶されたことを伝えている[『旧記雑録後編』3. 896号]一)、新たにコーチシナ(ベトナム)への派船を考えたようである。慶長4年の「覚」17ヶ条に、「かうちへ渡唐船之事」(12条)が見られる。実際に義久は慶長6ないし7年(1601、1602)に安南国大都統端国公(阮氏)に書を遣わし、その返書に対して慶長8年正月(1603年2/3月)に再び答書を送った(同書、1780号)。島津氏が幕府から安南渡航の朱印状を発給されたのは慶長10年、1605年のことである。一方、マニラ貿易のために、島津氏は1600年に司教ルイス・デ・セルケイラに使者を遣わしてマニラ渡航のための書状cartas de favorを求めた。「薩摩の国の奉行3人が、現在都にいる彼等の主兵庫頭(義弘)がその地に派遣する2隻の船のために書状を与えてくれるよう私に求めてある人物を送ってよこしました。...彼等の言によると、船の1隻の船長はキリスト教徒でフアンと称します。私はこの2隻について総督に書きます。」(マニラのチリーノ宛、1600年10月1日付、長崎発信。Jap. Sin. 20II. f. 68)。島津家の者が長崎に司教を訪れたのは関ヶ原の戦いの始まる直前のことで、島津氏は西軍に転じた頃でもあった。フアン(ドミニコ会のフランシスコ・モラーレスによると、フアン・ロペス)、すなわち船長大迫吉之丞フアンは家康発行の朱印状をもたずに司教セルケイラの書状のみをもってマニラに渡航した。島津氏は、慶長9年5月10日(1604年6月7日)付の維新(義弘)の少将(家久)宛書状によると、幕府の取次山口直友を介してマニラ渡航朱印状を幕府に依頼したが、しかし、家康はこれを認めなかった(上書、1949号)。幕府が島津氏に発給した異国渡航朱印状は慶長9年から14年(1604～1609)まで8通であるが、マニラ宛の朱印状はついに発給されなかった。

5. 小西一族の薩摩避難

関ヶ原の戦い(1600年10月)後、八代麦島城主小西美作ディオゴ(作右衛門、行重・行長の弟主殿介とも女婿とも言われる)は、家臣ら500名(一説に1500人、島津家分家西川家系図では70人)を率い、京泊さらに川内に至った。小笠原アンドレ(馬術指南)と志岐の城主日比屋平右衛門ヴィセンテ、及びイエズス会士2名が同行したが、宣教師は仏僧の反対によりほどなく長崎に去った。その後、ヴァリニャーノは日本人イルマンを島津家久に遣しているが、これは後に言及するように島津氏がイエズス会に対しマニラ貿易への斡旋を依頼していたことに関わるのかもしれない。島津氏が小西美

作とその一統を受け入れたのは、義久と小西行長との信義関係が行長の宇土転封以来続いており、また関ヶ原の戦いでは同じ西軍にあって家康に対峙したこと、さらにマニラ貿易推進のためにイエズス会との融和関係維持が必要と痛感していたからであつたらう。

美作ディオゴは1602年初め頃に死没したが、家久は嫡子作右衛門ディオゴ(11歳)に父の所領6000石を与えた。美作ディオゴの遺体が同年3月下旬に長崎に運ばれ同地で葬儀がなされた後、息子ディオゴは、にあばらリス神父を伴って薩摩(東市来の江口)に戻った。にあばら神父は1603・04年に島津氏と江口のキリシタンを訪問している。同神父は1605年にも薩摩の江口を再訪し200人以上の告解を聴き37名に洗礼を授けている。さらに彼は川辺に行き老ミゲルの子(父と同じ洗礼名)を訪れた。この時、子のミゲルはザビエルが父に与えた遺品の信心具(コンタスと聖水の入った壺)を宝物として保管しているとして神父に見せている。しかし、市来から川辺に移っていた領主新納氏はキリスト教に対する態度を硬化させており、聖母像・祭壇・天蓋をキリシタンから取り上げ、聖母像をマニラ商人に売却し、天蓋の布で子供達の服を作った、と言う(ジョアン・ロドリゲス・ジラン、1606年3月10日付、長崎発信の「日本年報」)。にあばら神父は1608年にも、鹿兒島に島津家久を表敬訪問し同地のキリシタンに宣教し、のち江口のキリシタンをも訪問した。しかし、川内のキリシタン武士税所七右衛門レオンが主君北郷加賀守の棄教命令を拒み斬首されたのは同年11月16日のことで、前藩主義久はその正当性につき発言し処刑を是認した。1609年4月末には小西ディオゴは改易され、家臣と共に追放され長崎に退去した。

6. ドミニコ会士の薩摩宣教

司教セルケイラは教皇クレメンテ8世に1603年1月1日付で発送した報告書において、教皇グレゴリオ13世が発した勅書にも拘らず、1602年7月にフィリッピン諸島からスペイン系托鉢修道会の宣教師16名が大挙来日したことによって、「おびたしくしかも重要な不利益がこの教会のために生じた」(チースリク「セルケイラ司教の報告書」『キリシタン研究』13、302頁)として、日本の可変的な政治状況を踏まえてキリシタン教界の将来について懸念を表明した。さらに島津氏のドミニコ会士の招聘問題に関連して、かつてイエズス会は三度島津領内にレジデンス建設を試みたが、島津氏の関心がフィリッピン船の寄港による利益以外にはなかったために失敗したとして、次のように述べている。

「ドミニコ会士を招待する前に、彼(島津氏)はイエズス会の修道者たちと全く同じ契約をしようとした。すなわち、もし[マカオの]ポルトガル人にそこへ船を送るように

彼らが交渉をするならば彼らを領内に迎えて、その領地の果てにあり、甕と称する小さくてあまり価値のない島を与え、そこで彼らのために住院と聖堂を建てるということであった。そしてすでにルソンからその島へ船を送る、と自分に示されたことも言い加えた。しかし上記の[イエズス]会の修道者はこのことが靈魂の救いのためではなく、ただ貿易と利益のために過ぎないと良くわかっていたし、また約束したことを後に果たすことが出来ないだろうと恐れていたので賢明にもこの提案を断った。」(同311頁)。

島津氏はイエズス会に対してポルトガル船の甕島招致を前提として宣教を許すというものであったが、セルケイラは島津氏の甕島招致に対するイエズス会の対応を評価し、ドミニコ会による薩摩宣教着手が賢明さを欠いたもので、着手以前にもっと熟慮すべきであったと批判した。

ドミニコ会の薩摩宣教はどのようにして始まったのであろうか。フランシスコ・モラーレスが1620年初めに執筆した「ドミニコ会士が日本にきた起原に関する報告」(ホセ・デルガード・ガルシア編注、佐久間正訳『福者フランシスコ・モラーレスO. P. 書簡・報告』)によると、ドミニコ会士来日の発端は次のようなものであった。1601年の聖金曜日(4月20日)に日本から来たキリシタン数人がドミニコ会の教会を訪れ、彼らの一人フアン某(D. アドゥアルテの1640年著述『ロザリオ管区史』によると、「フアン Sandaya (三太夫?)」)がモラーレスに会い、翌日彼が連れて来た船長のフアン・ロペス(「大迫文書」中の「寛永11年3月大迫吉之丞「口上覚」」によると、ルソン渡航にあたり「きり死旦宗」に改宗した、という)はモラーレスに日本に行きたいならば同行すると言い、薩摩の殿も喜ぶだろうと申し出た。モラーレスは管区長フアン・デ・サント・トマス・オルマーサにこのことを伝え、管区長は薩摩の殿が修道士を望むなら翌年派遣すると述べて、島津氏に正式の招聘状を求めた。島津氏は、アドゥアルテによれば、薩摩国の野戦司令官 Maestro de campo del Reino Satsuma なるTintionguen (忠恒カ)の名で書状をマニラ渡航の吉右衛門レオン(レオン・フェルナンド)に託して管区長に送り、ドミニコ会の宣教師を正式に薩摩に招いた。書状の日付は慶長6年9月22日(1601年10月17日)である。

モラーレス神父率いる第1団5名は、翌1602年6月1日に吉右衛門レオンの船でビノンドを出帆し、7月3日下甕島に到着して、宿所にロザリオの聖母の像を安置した。ドミニコ会が島津氏の招聘状に拘ったのは、1600年12月に教皇クレメンテ8世がグレゴリオ13世の禁止令を緩和した勅書が出たことをまだ知らず、島津氏に招かれて日本に渡航したという手順を踏むことによってイエズス会の批判を躲そうとしたためであったろう。同年7月中旬、モラーレスらは忠恒(家久)に招かれて帖佐に赴き、11月まで同地であって宿主一家に授洗した。彼らがようやく教会建設の許可を得て甕島に

戻ったのは11月であった。島津氏がドミニコ会士の宣教を保護奨励するために招いたのでないことは明白で、司教セルケイラの懸念はそうしたことを把握した結果であったことが分かる。また、島津氏が宣教師を甌島に押し込め、同地に宣教を制限したのは、島外(本土)にキリスト教が及ぶことを極力抑えようとしたためであり、同島に到着したマニラ船の情報が長崎奉行や家康にもたらされることを警戒した結果でもあったろう。

1604年にアロンソ・デ・メーナ神父は会議のため一時マニラに戻って商船の薩摩渡航を要請し、フアン・デ・ロス・アンヘルス・ルエダ神父を同行して甌島に帰還した。同年終りには甌島でおよそ80名の改宗者があった。ドミニコ会の出費によって準備されて1605年に到着したディエゴ・ホルへの船が薩摩到着後に強風のために難破し積荷の大部分を失ったことは、ドミニコ会に貿易に関与すべきではないとの教訓を与えた(トマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガの1605年11月20日付、大村発信の書翰)。島津氏は貿易続行のために新船を建造してホルへに与えた。ホルへの船が難破したのは、甌に第二の教会ができた8月15日から14日後のことで、新教会も台風のために破壊された。このため、メーナは島津氏に対して甌島以外の本土に教会用地を請願して、京泊に居住を許され、サント・ドミンゴ修道院を建てた。その地は「町の郊外で港が近く、丘の上で二つの寺院の間に」あった。同修道院にはモラーレス、メーナ、スマラガ、ルエダの四司祭と修道士アバディアが居住した。さらに翌1606年6月2日には同地にロザリオの聖母教会が落成した。

1608年8月、京泊の修院長モラーレスは島津氏を介して家康訪問を促されて上洛し、さらに年寄本多正純の仲介で江戸の将軍秀忠を表敬訪問した。1609年初め、ホセ・デ・サン・ハシントは迫害の噂を耳にして急ぎ加治木に義弘を訪問した。モラーレス神父は4月初めに京泊に帰着したが、5月初旬に遂にドミニコ会士は薩摩退去命令を受け、同月末、同地を去った。ロザリオの聖母像と殉教者税所七右衛門レオンの遺体と教会の木材を積み込んだ船は長崎に着いて、外町の代官村山等安の援助を得て彼の土地があった勝山町に京泊の教会を移築し復元した。島津氏がこの年4月に琉球出兵に踏み切り、琉球貿易独占に乗り出したことが、ドミニコ会士放逐に影響を与えたことは否定できないようである。

7. コウロス文書と薩摩のキリシタン

1617年(元和3)にイエズス会管区長マテウス・デ・コウロスが全国の指導的なキリシタンに署名を求めて集めた、所謂、「コウロス徴収文書」なるものがある。これは、コウロスが1614年11月以降も続いた禁令下においてイエズス会宣教師が自らの義務

を果たして宣教活動に従事していることについて全国のキリシタンに証言を求めたもので、15ヶ国76ヶ所から集めた文書76通で761名が署名している。薩摩国については2通の証言文書がある。他にも徴収されたか否かは不明であるが、おそらく署名者の出身地から見て徴収文書は2通であつたろう。2通の文面は3項目からなりほぼ同じ内容で、予めイエズス会側が作成した書式と文面のものを宣教師が持参したようである。1614年の「へるせきさん *perseguição* (迫害)」が始まって3年になり、この間に「こんはにやの出家」すなわちイエズス会のパードレが5度薩摩を訪れて、「こんひさん *confissão* (告解)」を聴きミサを立てたと証言している。第46文書には、鹿児島 の3名、
 額賀郡の2名、河名部(川辺)の1名の計6名が署名している。額賀郡の大迫久兵衛寿庵(*Vozamari Quibiyôe João*)はマニラ貿易に関わっていたファン・ロペス大迫吉之丞の一族であろうか。川辺の是枝善右衛門婦らん志す(*Coreyeda Jenzayemô Francisco*)は市来から同地に移った新納氏の家臣であつた可能性がある。第47文書には串木野の1名とせんだい(川内)の2名が署名している。彼らは、ポルトガル語表記の洗礼名であることから見てイエズス会の宣教師から洗礼を授かつた者たちであつた、と推測される。

イエズス会の宣教師は1617年以降も1624年までは薩摩領内に赴いていたことが知られる。「1622年度日本年報」によると、一人のパードレが約150人のキリシタンの告解を聴き、20人に聖体を授け、成人6人に授洗した。また、彼はコンフラリアを刷新し、これに活力を与えた(*Jap. Sin. 60. f. 44v.*)。コンフラリアは1つだけでなく、いくつかあつた。「1624年度日本年報」は、永俊カタリーナについて次のように報じている。「当地での彼ら(キリスト教徒)の柱となり支えとなつていたのはカタリーナと称するその国の領主の姑で、両親や祖父母がそうであつたように、きわめて高貴な女性で立派なキリスト教徒です。彼女はキリスト教を棄てるようにとの女婿の多くの戦に抵抗する新たな霊的力を神父の来訪によって特別に受けました。」(*Jap. Sin. 60. f. 460v.*)。

おわりに 一薩摩における祖先崇拜とキリスト教一

ザビエルが日本宣教において痛感し、彼にとつても大きな課題となつたのは、日本人の祖先に対する深い思いであつた。「日本のキリスト教徒達には、一つの悲嘆があります。それは、地獄に堕ちた者にはいかなる救いもない、と私達が言う、と彼等が深く悲しむことです。彼等がこのことを悲しむのは、亡くなった父母、妻子やその他の死者達への愛のために、この者たちを哀れんでいるからです。多くの者は死者達のために涙を流して、喜捨や祈りによって何らかの救いを得ることができないか、と私

に尋ねます。私は、どのような救いもない、と彼等に言っています。」「私もまた、そのような愛すべき親しい友人達が手立てのないことを嘆いているのを見ると、少しく悲しみを催します。」(1552年1月29日付書翰、1(下)、112～113頁)。このザビエルの思いはおよそ1年間滞在した鹿児島においても変わらなかったであろう。むしろ鹿児島において強く実感したかのように思われる。ザビエルは、この祖先信仰の問題についていかに解決すべき腐心したようであり、そのために、パリ大学にいる神学者や哲学者らの来援を強く期待したのであろう。

先祖の救いに対するキリスト教の姿勢については、貴久の実父忠良の耳にも達していたであろうし、彼はイルマン・アルメイダの訪問を通じてキリスト教についての知見も深めていた。彼が天文8年から同14年(1539～45)頃にかけて家臣団の精神涵養のために創作したとされる「いろは歌」47首において、「めくりては我身にこそハつかへけれ 先祖のまつり忠孝のみち 忠孝の道我身のつかへと成由、又眼前候」(『旧記雑録前編』2、2509の2号)と詠んで先祖に対する供養の大切さを説いて忠孝がいずれは自分に向けられること、またそれが目の前にあると説く。あるいは「ほとけ神他にまします人よりも こころにはちよ天地よくしる 人生生一念、天地悉皆知」と詠んで、神仏が別世界にあるのではなく、天地はすべてよく知っていると教え諭している。「天地悉皆知」の意識は当時日本社会に浸透していた天道思想が忠良にも影響を与えていたことを示している。

忠良の死後30年が経った慶長2年(1597)3月に書かれた伝記「日新菩薩記」において、日新斎(忠良)の御詠歌が一向宗禁制の中で引用されている。「諸所ニ一向宗起テ父母ヲ輕ンジ仏神ニ疎ズル者ト間ノ作法ニアラズ、...因之神明仏陀ヲ忘レ父母先祖ニ背ク輩ニ於テ制禁ノ辛カリシ事祥左御詠 魔のしょいか天けん(天眼)おかみ法華宗一かふしうすきのこさしき」(「日新菩薩記」)。父母先祖を疎んじるものとして、忠良は天けん(天見・天眼)、法華宗、一向宗、数寄(茶道)を名指しして、これらを禁止した。「一向宗御禁制由来」は、「天けんおかみ(拝み)とは当分之切支丹宗を天教とも申候間、右の類いには無御座候哉」(鹿児島県史料刊行会編『鹿児島県史料』IV、「一向宗禁制関係史料」)と説明する。「天けん(眼)」すなわちキリスト教は、忠良によって父母先祖を蔑ろにする所為として、また人間の作法に悖るものとして規定され、一族と家臣そして領民に訓導されていったように思われる。外国貿易に強く執着した島津氏が異国船招致のために便宜的に宣教師を受け入れようと努め、彼等を辺鄙な甕島に封じ込めようとしたことは十分に納得のいくことである。薩摩国内においてキリスト教が領民に広く受け入れられなかった背景には、これまで見てきたように島津氏の宗教政策が大きく影響していたと見ることができる。ザビエルが日本全体の王(天皇)から宣教の保護とその許可を得ようとして上洛を急いだことは、彼が鹿児島で経験し感じ取った困難

を、国王を通じて克服できると期待していたからであつたろう。

＊『日葡辞書』（1603）：Tenguen 天眼 Tenno manaco（天の眼）、デウス（神）の眼、
またはデウスの照覧。（1604年補遺）：Tengan テンガン（天眼） Ten, Manaco（天、眼）